



対馬丸記念館と、遺族・サポーターを結ぶ、ふれあいの情報誌

対馬丸 通信

発行：(財) 対馬丸記念会

発行人：高良 政勝

編集：対馬丸記念会事務局

Tsushima maru press

平成 26 年 3 月 31 日発行 第 28 号

一つの県外調査から見えてきたもの、感じたもの

学芸員 慶田盛さつき

昨年県外への語り部活動に同行して調査活動を実施してきたが、その時に感じた事をまとめてみた。

愛知県調査

「戦争と平和の資料館ピースあいち」は、毎年6月23日前後に沖繩戦に関する特別展を開催している。今年は「対馬丸沈没展」を行うことから、その関連イベントとなる講演会へ生存者の上原清氏を語り部派遣することになった。

対馬丸事件の実相を伝え、当館の理解をより深めてもらうとともに、今回の交流を機に、館同士の資料を互いに借用し展示会を開催することとなった。

ピースあいちが対馬丸事件をテーマに取り上げた大きな理由は、愛知県が小桜の塔建立に深くかかわっていたということである。しかし、この事実は両県においてあまり知られていない。そこで、今展示会を機に愛知県のより多くの方にご覧いただき、生存者

の上原氏と遺族で当館常務理事がそろって愛知県を訪れ、語り部活動及び交流を行うことは、とても大きな意義をもつ。講演会へは百名を超える聴衆が

集まり、

注目の大

きさを感じ

じた。途

中沈没の

様子を身

振り手振

り語る場

面では、

会場全体

が上原氏

の話に引

き込まれ

聞き入っ

ていた。

講演後の

意見交換

では、上原氏へ事件の様子を中心

に質問や感想などが上がり、また

小桜の塔と愛知県のつながりに

についても質問が及ぶなど、関心の

高さを感じた。



また、ピースあいちのボランティア員に、小桜の塔弔歌の作詞者である山崎敏夫氏の親族(娘・孫)がいることがわかり、山崎氏の人柄や当時の経緯などについて

お話を

伺うこと

ができた。

近くにお

墓がある

とのこと

で、急ぎよ

お墓参り

をするこ

ともでき

た。弔歌

に曲がつ

けられ歌

われてい

ることを

知らな

かったこ

とから、携帯電話を通してつしま

丸児童合唱団の歌う弔歌を聴いて

いただき、感謝の意を伝えた。

会場に地元の中日新聞社の記者

が取材に来ており、講演会を通し

て愛知県の情報収集(当時小桜の塔建立に関わった「すずしろ子供会」や募金運動に携わった等)を兼ねて取材協力をした。今後、何らかの情報等があれば連絡を頂くという事で連携の確認をした。

今展示会及び語り部派遣を通し

て、県外でも対馬丸および学童疎

開に関する活動・交流をもつこと

で、新たな情報や縁を結び今後の

調査活動や平和活動の発信等に活

かしていきける大切な機会になった

と感じた。その土地へ行き、人と

話をするこの大切さを改めて感

じた。小桜の塔は、戦後悲痛な心

境の中にいた対馬丸の生存者や遺

族にとつては、皆で寄り添い慰霊

の心を一つにする抛り所となり、

今日でも慰霊祭には三百名あまり

が参列する大切な場所となっている。

また、今では地域を始め子供

たちの平和学習の場にもなってい

る。すずしろ子供会の思いが現代

に受け継がれており、その建立に

携わった愛知県へ感謝の気持ちも

そえた訪問が叶い、意義のある派

遣となった。

宮崎県調査

庭に実った柿を食べた子がいてね。そこのご主人が怒って来たもんだから、「この子は盗んだんじゃないかって、この子にとつてはこれがお飯なんです」って事情を説明し謝ったら、次の日袋いっぱい柿を頂いてねー

昭和20(1945)年、宮崎県の高崎町で学童と疎開生活を送っていた糸数先生のエピソードである。昨年10月、生存者で当時訓導だった糸数裕子先生との都城市立高崎中学校への語り部派遣を兼ねた二泊三日の旅は、何かの力に導かれるかのような偶然の再会や出逢いの連続だった。



2年担当教諭が、地元の高齢者を訪ねるなどして、戦時中に沖縄から疎開があった事実を知り、学童疎開や対馬丸事件について2年生64人による調べ学習が始まった。また聞き取り調査を進める中で、高崎からも多くの人が出兵し犠牲となった人々の忠霊塔が学校の裏山にあることや、高崎町や都城市も空襲の被害に遭っていたことなど、地元の戦時中の様子についても分かってきた。そこで、これらのまとめ学習の成果を広く伝えるため朗読劇を制作、文化祭で演じた。



高崎中学校が対馬丸事件を教材に学習に取り組むことになったきっかけは、同校校庭にある「沖縄高崎会来訪記念樹」と刻まれた石碑である。この小さな石碑の存在に気づいた



習発表だった。

当日、会場には聞き取り調査に協力した地元の戦時体験者三名も同席した。そこで、偶然にも糸数先生が当時教えていた高崎国民学校一年生だった村吉さんと六十八年ぶりの再会。当時の思い出話が次々と飛び出した。さらに、翌日は同窓会があり40名程が集まるとのこと、急遽教え子たちとの再会のチャンスに特別ゲストとして参加することとなった。また、当時六年生だった中村さんの家では、安次富という疎開家族を受け入れ、その時に生まれた安次富家の子に中村さんの父の名前をつけたというエピソードを話してくれた。このように、疎開を受け入れた側の話を聞くことは、当時の疎開生活を知る上で貴重な情報となることが多い。

報となる。このひとときの中でもいろいろな話を聞くことができたので、日を改めて聞き取り調査をしたいと感じた。

その後、劇を演じた生徒たちのたつての希望で糸数先生と初対面。糸数先生は、生徒たちからたくさん質問や握手を求められるなど、お互いに感無量といった表情で貴重な交流会となった。それから校庭に大きく育った記念樹を見、名残惜しく高崎中を後にした。

翌朝、対馬丸の生存者が最初に学童疎開をした加久藤へ移動。糸数先生が学童と疎開生活をしてきたえびの市立加久藤小学校へ。当時の校舎や周辺の町の様子などは変わっていたものの、糸数先生の記憶を頼りに当時お世話になった家を訪ねてみると疎開時を知る親族と出逢ったり、地元の方へ声をかけると疎開家族を受け入れていた家庭だったり、確かに疎開があったということは知っており、今でも交友をもつ方もいる状況であった。しかし、家族間や個人では語り継がれているものの、地域の歴史の中では埋もれている状況だと感じた。



今回の交流を通して共通に言えることは、他者からの働きかけがない限り外へ知られることなく個々人の中で当時の体験や思いが埋もれている状況にあり、今後消えていく可能性があるということである。疎開を受け入れた側にとつては受け身であったことから尚更である。疎開体験者側と疎開を受け入れた側、さらにお互いの記憶を合わせることでさらによみがえる記憶、その記憶を事実として歴史に繋げるため、疎開関係地域へは、改めて掘り起し調査をすると共に、学校などへ情報を発信して交流のきっかけをつくり、学校・地域と連携をもちながら調査活動や地域の平和学習へ活かしていくればと感じた。開館十年目の今年、これからの先十年に向けて、時間との闘いの中で新たな資料模索の必要性を痛感した二つの調査だった。

第1回 子供平和会議が開催されました

主催：公益財団法人対馬丸記念会 協力：学校法人尚学学園
 後援：沖縄県教育委員会、県内マスコミ各社

「地球市民」を議論



ドイツの移民問題を題材に、グローバル・シティズンの考え方について議論する高校生ら。那覇市の沖縄尚学高校

国際理解や平和について考えよと、那覇市の沖縄尚学高校で8日、「第1回子供平和会議」が開かれた。同校と普天間高校、宮古高校、八重山高校から生徒約50人が参加し、ドイツの移民問題などを題材に「グローバル・シティズン（地球市民）」の概念について議論した。公益財団法人対馬丸記念会の主催。

尚学学園の名城政一郎副理事長は講義で、労働力不足を補うため400万人のイスラム系移民が暮らすドイツでは、反イスラムデモが起きるなど対立が激しくなっていることを説明。「日本でも将来対応を迫られる問題だが、大人は先送りしている」と問題提起した。

その後、生徒は6グループに分かれ、移民を受け入れる条件について話し合った。生徒たちは「宗教など変えられないポリシーはある」「ナショナル（国）ではなくグローバル（地球規模）の利益を考えないと」となど議論を交わした。

事前学習をして議論をリードした12人のコアメンバーの一人、沖尚高2年の金城理華さんは「宗教や人の考え方も違うので移民問題は難しかった。まずは話し合い、みんなの意見を聞きたい」と話した。



子供平和会議のコーディネーターと事前レクチャーを名城政一郎教育博士（尚学学園副理事長）に努めていただきました。



沖縄タイムス 平成 26年 3月 9日

今回、子供平和会議に参加した、高校生の感想をいくつか紹介します。

将来、国際関係の仕事に就きたいと思っているので、今回の会議に参加し、多くのことを学ぶことができた。例えば、グローバルイゼーションについて、日本は他の先進国と比べて、遅れていることが分かった。これから日本を創り上げていく私たちが国際関係について学び、国際社会で活躍できる人になりたいと思った。

向陽高校1年生
 開邦高校2年生

今後必ず課題になるであろう移民問題について他校の生徒と議論できたので、良い機会になった。移民側と受け入れ側との間の溝をなくせるように話し合いを進め、統一と多様性の観点から双方にとって良いものになることが大事であると考えます。

いかにして共存するかを考えた。議論を通して解決案をまとめたが、この案は限定的な状況でしか通用しないものである。普遍的に異質の文化同士が共存するために、「グローバル・シティズンシップ」を全人類が理解し実行することが有効であると思う。しかし、全人類がそう出来るほど理性的であるとは思われない。何かしらの暴力装置が必要になると思う。

沖繩尚学高校2年生

那覇国際高校2年生

この企画に参加し、色々な人と意見交流をすることが出来た。コーディネーターの名城先生の話を聞いて、グローバルシティズンになるための知識を得て、その後に同世代の参加者と移民に関するディスカッションを行い、統一と多様性の分別を行うことが出来た。今回学んだことを、大人とグローバル・シティズンシップを持つている人になる為に活かしていきたい。この

今回の平和会議に参加したことで、沖縄の中では普段実感しない地球全体としての視点を持つことが出来た。日本でも移民受け入れの問題が出ている中で、ドイツでの移民の例は他人事と初めてディスカッションというものをして緊張したが、色々な人の意見や考えを聴くことが出来て、勉強になった。自分達が大人になった時に起こるであろう問題をシュミレーションする良い機会になった。

八重山高校2年生

今回の議題である移民の受け入れ問題を通して、異質の文化がいかにして共存するかを考えた。議論を通して解決案をまとめたが、この案は限定的な状況でしか通用しないものである。普遍的に異質の文化同士が共存するために、「グローバル・シティズンシップ」を全人類が理解し実行することが有効であると思う。しかし、全人類がそう出来るほど理性的であるとは思われない。何かしらの暴力装置が必要になると思う。

沖繩尚学高校1年生

3回と続き、国際的な意見交流

沖繩尚学高校1年生

トピックス

□10月18日～21日

生存者で語り部の糸数裕子さん(当時那覇国民学校訓導)の宮崎県での語り部活動に仲間子常務理事と、慶田盛さつき芸員が同行し、調査を行いました。



教諭 長嶺 有希氏
那覇市立上山中学校

教諭 金城 香里氏

財団法人沖縄県平和祈念財団

主査 平田 守氏

公益財団法人対馬丸記念会

理事長 高良 政勝

□12月25日～平成26年1月19日

第21回特別展「沖縄タイムス社

主催第61回全琉図画・作文・書

道コンクール 那覇秀作展」

今年も図画・作文・書道コンクール那覇地域の児童の秀作(優秀賞以上の図画、作文と書



道)を選抜展示しました。昨年

は展示出来なかった作文をコ

ピー合冊し、閲覧スペースを設

けきちんとした秀作展が実施で

き、多数の父兄に来館いただき

ました。

□2月19日

対馬丸記念館運営委員会

対馬丸記念館の特別展や展示・

運営に関して会議し、次年度の

平成26年度は開館十周年になる

ことから今後の活動の指針について特別展の持ち方なども含めて話し合われました。

□2月22日

第24回「やんげんじゅう講座」

「タバコが奪う沖縄の未来」



煙に対する害を訴えて来た先生

ならではのショッキングなタイ

トルで、若年喫煙層に対する警

告と、保護者や親族に対する禁

煙教育の啓蒙を熱心に語って戴

きました。

□3月5日～8日

外間邦子常務理事が岡山にて

語り部活動をしました。

これは沖縄観光コンベンショ

ン・ビューロー(OVCB)に

よる派遣事業で、同県の二つの中学校へ出向いて修学旅行の事前学習として行ったものです。

派遣された中学校の近くに、

平成19年以来当館を支援してい

ただいている(株)山田養蜂場

があることから、スケジュール

の合間を縫って同社を表敬訪問

し、高良政勝理事長の感謝のメッ

セージを手渡しました。

□3月8日

第1回子供平和会議(主催:公益

財団法人対馬丸記念会 協力:学

校法人尚学学園 後援:沖縄

県教育委員会、県内マスコミ各社

今年度より、新たな事業とし

て子供平和会議を開催いたしま

した。

今回は対象を高校生に絞り、

沖縄尚学高校を会場にして開催、

平和構築の基本的な考え方とし

プ(世界市民)の考え方を学校

法人尚学学園副理事長の名城政

一郎教育博士のレクチャーをも

とに、異文化・異民族間の共存

の道を、ドイツのトルコ移民の

問題を通して、討論しました。

(本文3ページの関連記事参照)



ご寄附

香典返し

□3月5日

協力会会員の服部千弥子様よ

りご主人の香典返しを頂戴いた

しました。故人のご冥福をお祈

りいたします。

□12月17日～平成26年3月10日

美濃地三郎、泊顕彰会顕彰会、

村越千代子、村松信高、石川雄治、

基地のない平和な沖縄をめざす

会、石神幸郎、高良美寿代、渡

口眞常、服部千弥子、池宮照子(編

集事務所ヴァリエ)様、以上の

方々からご寄付を頂戴いたしま

した。心よりお礼申し上げます。

(本文2ページの関連記事参照)

□10月23日

平成25年度平和学習推進連携事業委員会 第1回委員会議

昨年度作成された「対馬丸記念館ワークブック」の活用状況と、今年度実施予定のアンケート調査についての会議が行われました。今年度の委員は左記の各氏です。

那覇市教育委員会学校教育課

指導主事 平良 一氏(委員長)

那覇市立天妃小学校



沖縄大学人文学部福祉文化学科教授の、山城寛医学博士を講師に迎えて恒例となった医療・福祉に関する講座を行いました。

医療現場や学校で喫